特集　命の連鎖を考える

江村　薫

数年前に旅行した12月のニュージーランドは，実に美しかった．河川敷には色とりどりの花が咲くルピナス群落，山裾や空き地には黄色の花のエニシダ群落，家庭の庭には世界の園芸植物が咲き誇っていた．ルピナス群落は旅行会社のパンフレットに頻繁に登場し，観光資源にもなっている．

最初は美しいと思ったこれらの光景だが，外来の園芸植物が雑草化していることや，各種の園芸植物に害虫がきわめて少ないことに気がついた．日本における北米原産の侵入植物で秋に黄色の花が咲くセイタカアワダチソウ群落と，前記したエニシダ群落がよく似ていることに気がつき，山裾の黄色い群落が汚く見えだした．

なるほど，ここは地球の進化から隔離されたオセアニアであり，作物は外来種であるために病害虫も少ない．ガイドが話していた「この地は不思議と作物が良く育つ」との内容と一致する．本号の森本論文の最後に記述されている内容につながるのであるが，ニュージーランドが国の浮沈をかけて，外来生物の侵入阻止を行っている理由である．すなわち，作物や園芸植物は良いが，それを加害する病害虫は阻止しなければならないわけである．近年，レトルト食品を持参していたことで，入国時、空港において2時間拘束された話を知人から聞いて，その実情がよくわかった．食品の移動にはきわめて厳しいのである．

TPP（環太平洋経済連携協定）への日本の対応が注目されているが，生物移入を厳格に行うことは，今後の日本農業の再建と深く関わる．日本からの安易な農産品の輸出も考慮する必要がある．食料生産における共生菌なども含めた「命の連鎖」や生物多様性保全との関わり，生産方式や食文化など，どのように考えたらよいのか．人口が爆発的に増加しているなか，私たち人類の個々人が「命」であるとともに，地球上には多くの「命」が生まれ，相互に進化し，変貌し，生物間での共生を経て現在がある．

本号の特集では，地球上の多くの生物に支えられて営んでいる人類について，安全・安心な食料生産のあり方を中心に，その方向性を明らかにしようとした．

河野論文は，人類の食料確保での捕食の連鎖に関わる倫理意識について，その歴史的背景，動き出している動物福祉や有機畜産の農法による付加価値の付いた畜産物生産の可能性，人類が動物食を行う是非などについて論じている．

太田論文は，地球の歴史の中で植物や動物が微生物と共生関係を基礎に進化してきた実態を整理し，農業のあり方が微生物や自然と共生する，環境保全に貢献する産業に変貌する必要性を説いている．

桐谷論文は，これからの安心・安全な農業は，有害生物管理から生物多様性管理を視野に入れた新しい農法が必要だとし，温暖化や外来生物による影響も含めて，具体的事例を昆虫類に多くをとりながら論じている．

森本論文は，動植物の検疫制度の重要性を説き，侵略的外来生物が農業生産での甚大な経済的損失と農薬使用量の増加をもたらし，地域の生態系を乱している事例と対策を紹介している．

（**えむら・かおる**：埼玉支部，農業生産環境）